

湘南慶育病院

症例概要 【症例概要】

患者 : 60歳代 女性
病名 : 陳旧性左被殻出血
入院期間 : 2022年5月～ 2022年7月

【経過】

約6年前に左被殻出血にて右痙性片麻痺を呈し、回復期リハビリテーションを施行後、翌年より他院で外来リハビリテーションおよびボツリヌス治療を継続された。今回、集中的な作業療法を希望され、当院の地域包括ケア病棟へ入院となる。重度の上肢運動麻痺であったが、「発症してから初めて物をつまんで離すことができた」と喜ばれ、最終的には書字ができ、スプーンの練習ができるまでに回復した。

内 容

【症例紹介】

患者さん（60歳代 女性）、2016年11月に発症の左被殻出血にて右痙性片麻痺を呈し他院（A）入院となる。その後約1ヶ月後から回復期リハビリテーションを施行後、さらに2ヶ月後から他院（B）で外来でのリハビリテーションおよびボツリヌス治療を含むリハビリテーションを継続された。今回、上肢機能に対する専門的なリハビリテーションを希望され、当院の地域包括ケア病棟へ入院となる。

上下肢の重度の運動麻痺を呈しており、日常生活のセルフケアは自力で可能であるが、上肢は運動麻痺と痙縮により手を使う活動が難しい状態であった。他院でのリハビリテーションは、主に他動的に関節可動域を拡大するものであったが、今回、神経筋電気刺激（NMES）や装具療法、課題指向型訓練という脳卒中ガイドラインでエビデンスのある治療方法を実施した。加えて、自主トレ冊子の提供とご本人のスマートフォンで訓練の動画を撮影し、退院後にも訓練が継続できるように支援した。さらに、3Dプリンタにより本人用のトレーニング道具を提供した。

【症例変化】

開始当初は物品をつまみ・離すことが不可能であったが、医師の許可のもと、作業療法で神経筋電気刺激（NMES）や装具療法によって徐々に肘や手の随意運動が拡大し、物品のつまみ離しが連続してできるようになった。ご本人からは「発症して初めて物をつかんで離すことができてうれしい」と感想

が聞かれ、当初は1ヶ月の入院を希望したが、治療効果を期待し、追加で1ヶ月延長することとなった。

その段階で、課題指向型訓練や自主トレの指導を導入し、麻痺した手を使用できるように促した。ご本人からは「(麻痺した右)手をまったく使っていなかったのも、正直何かができるようになるとはいままでは思えなかった。できれば字を書いてみたい」と訴えるようになった。訓練量確保のために、3Dプリンタでの本人用のトレーニング道具を提供して練習を進めたところ、最終的には書字ができ、スプーンの練習ができるまでに回復した。